



## I はじめに

6つの討議の柱を全体で確認し、この分科会で報告される5つの実践を中心に、「部落差別をはじめとする人権課題を自分に関わることとして、どう向き合ってきたか。自身の変容や生き方にどうつながっているのか」、「差別をなくす取組や思いをどう広げ、つなげていくか。何を大切に取組をすすめていくか」について、様々な地域、団体から参加されている参加者の実践、取組を交流しながら、討議を深めていこうと呼びかけ、報告討論に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

### 一 報告1-②

「生まれてよかった 住んでよかった」と言えるまちづくりをめざして～国東市社会教育課の人権・同和教育の取組について～（大分県人教）  
—主な質疑と意見—

**兵庫** 地区人権学習会のつくり方、組織はどうやってつくったか。町主体で組織がつけられたのかを聞きたい。

**報告者** 合併前の4町がそれぞれ40年以上前に地区学習会をはじめた。それぞれの町で、同和教育推進協議会のようなものをつくってやってきた。隣の町ではじまり、て、私たちの町でもやっていきたいと広がっていった。当時の4町の担当者どうしが交流する中で、広がってきた。

**愛媛** 学習会の開催の時間、参加される住民の反応が良かった題材を教えてください。

**報告者** 昨年度、今年度については1つの学習会で、約70分の学習プログラムをつくっている。それ以前は60分と90分の二通りあった。その中で、20分弱のDVDを見て、感想を出し合ったり、グループ討議を行ったりしている。「うちのサロンでこのDVDをみんなで見たいから貸し出してくれないか」など、学習会で使用したDVDを活用していただいている。

**兵庫** 学習会の事前の呼びかけ等の工夫を聞きたい。

**報告者** 参加する住民が増えている。全戸への案内の配布に加え、区長さんや各区の人権担当者等の声かけなど含めた協力が大きい。講師のアンケート等からは、参加者数だけではなく、住民がど

れだけ理解してくれるか、その内容も大事であるという意見もいただいている。

**協力者** 組織のつくり方などで補足できる方おられますか。

**大分** 町長や区長が学習会の講師として参加することで、ほかの職員も参加する。首長が代わるとそこまでしないといけないのかという時期もあった。行政の長の姿勢、影響は大きい。

**協力者** 人権のまちづくりをしていくにあたって、どう部落問題と向き合って、どう取組を広げてきたか。そのあたりに関わって、意見をいただきたい。

**協力者** 報告者はもし、この担当になっていなかったら、部落問題とどう向き合っていたと思いますか。

**報告者** 異動がわかった時、正直「人権の係か」と思った。周りの職員からも「人権の係か、大変やな」という言葉をかけられ、ますます気が重くなったのは事実。周りの人から聞いたイメージで先入観や偏見を持っていた。ただ祖父が中途失聴で、そのころから手話をしたいと思っていた。役場に入ってから障害者と健常者がともにイベントを企画する実行委員になって、多くの障害者と出会い、その人たちのことを仲間だと思ってきた。ただ、部落差別に関しては、よく相手のことも知らないのに、周りから受けた偏見や先入観だけで、やっかいだというように思っていた。

**協力者** 担当になり、今はどうですか。

**報告者** 今は、多くの方と出会い、関わる中で、部落問題を自分のこととして捉え、差別のことを私なりに正面から向き合っていこうと思う。

**協力者** 会場の方から、ご自身の実践と重ねて、意見をお願いします。

**兵庫** 同じように町合併して、旧区ごとに、またさらに小さな範囲での人権学習会を同和教育啓発研究委員として進めてきた。しかし、区長によって実施する・しないや、意見交流をする・しないなど、その内容にも差が出てきている。そうした中で、どうすすめていけばいいか。意見・アドバイスをいただきたい。

**大分** 国東市ではない町で、そこでは町長の差別発言があって以来、役場の職員が戸一戸の家庭に入って、啓発をしていこうとはじまった。毎年それはできないので、何年か前から地区懇談会という形で行っている。その際、町長は、町長という肩書ではなく、一職員として、その啓発の場に参加していた。立場ではなく、自分の生き方としてという部分が大切。

**高知** 2008年に部落差別事象があったと報告にあったが、その中身を聞きたい。また取組をしていて、差別をなくすことにつながっているのか見えてこないというのはどういうことか。自市では、市民意識調査で成果や課題を分析しているが、そのあたりについても聞きたい。

**報告者** 2008年の差別事象がおきた。きょう

だいが結婚する際に、その相手のつれあいが被差別部落出身者であったので、結婚式に呼ばないと相手の両親が言ったというものだった。行政の啓発が不十分だったという反省から、地区人権学習会の原点に立ち返り、同和問題に重点を置き、地区人権学習会を行った。それにもかかわらず、翌年、行政の特別職にある人の差別発言、さらに翌年には差別落書と、差別事象が相次いだ。その時、私たち職員自身が啓発・推進していかなければならないという思いから、全職員対象に差別事象についても研修を行ってきている。担当になるまでは、自分自身も研修を受けた際、聞くだけで自分のものにはなっていなかった。だからこそ、事前の研修会などでは、身近にあった差別事象などを説明し、あなたはどうか考えますかと質問するなど、私たちが職員に対して思いを通して伝えることで、自分のこととして考えてほしい。そのことを通して、住民から部落問題に関わる問い合わせや質問があった際に、職員が自分の言葉でしっかり答えてくれることにつながっている。

**滋賀** 合併後、市の教育長を執行委員長に市のほとんどの職員が参加するなど、大きな規模で人権講演会を行っている。自地区の集いでは、地域の方が必ず参加して、自分の体験や思いを語る場がある。地区単位の学習会には市の職員が企画から実施までともにつくっていく。

**兵庫** 行政の一人としての取組であると同時に自分にとって、一人の人間としての取組でもある。行政の取組としても進めていかないといけないし、その中で一人間としての変容がないといけない。自分の立場、一人間としての立場をうまく融合できたらいい。報告の地区学習会の中で、身元調査を認めるような差別的な発言や、寝た子を起す的な発言が出てくる。そうした発言が出てきたときに、それをどう総括して、次にどうつなげていくかが大事。現実にある差別を乗り越えていくためには、行政だけでなく、被差別の立場にある地区の人たちの思いをしっかりと聞くことなど、いろんな形で学習会を積み重ねていくことを通して、徐々に差別発言が少なくなっていくのではないか。

**滋賀** 合併以前、大字ごとの各組に役場の人が出向い、ものすごく細かく地区別懇談会を行ってきた。合併後は、大きな自治会ごとに行っている。どちらにもメリット、デメリットがある。それぞれの自治会が抱えている課題に合わせて、実施している。

**協力者** 学習会の中での差別的な発言をどう総括して、次にどうつなげているのかについて、とくにグループ討議にこだわって学習会を進めていることとも重ねて、報告者に答えてもらいたい。

**報告者** 結婚の際に身元調査をするのは差別ではないという発言を聞いた時、ショックだったが、そういう意見を出してもらわないことには本音の部分は見えてこない。そういう意見に対して、

どう返していくのか、行政職員も主体的に研修していく。すぐにそうした考えが変わることはなくても、まじりあうことがなければ変わらない。グループ討議で隣に座っているのは近所の方で、信頼関係がないと本音は語ってくれないし、私たちも心を開かないと語ってくれない。運動団体にも来ていただいて、グループの中で思いを語っていただく時間もつくっている。そういうことが地域の中のつながりにもつながっている。

#### —報告2—①

「学校・家庭・地域へのはたらきかけをととした人権尊重のまちづくり」 (香川県人教)

#### —主な質疑と意見—

**兵庫** 同和問題学習の公開授業について、参加しやすい体制をどうつくっているか、事後研修会のあり方、取組の検証をどのように行っているか。**報告者** 部落差別解消推進法をうけ、部落問題学習を進めていく必要を感じているが、どう進めていけばいいか悩んでいる、各校担当者の姿、また周りの学校でこそ、進めていく必要があるという問題意識から、今年から始めた。今までは近隣の学校に対して公開していた学校があったが、それを市の教育委員会として市全体に公開して参加できる体制をつくっていった。参加できなかった方にも授業の中身、討議の中身を伝えていくのかについては今後の課題と考え、来年度以降につなげていきたい。

**島根** 中学校区の取組について、人権尊重の精神の基盤とした保幼小中の共通のプログラムの具体的に教えてほしい。また運営委員会の中でのイベント等あるか。

**報告者** 中学校区で、子どもの今の課題は何かもう一度洗いなおす機会を、校区の教職員が集まって話し合う機会をつくった。部落問題を含め、子どもたちの生活背景も含めて見つめ、15歳時の校区の子どもたちのめざす姿として、整理した。それを具体的に、それぞれの発達段階でどのように育んでいくのか、保幼から中学校卒業までの共通プログラムとして、実践につなげている。運営委員会では、子どもたちの課題等を情報共有し、課題のある子へのかかわりを、今通っている学校園所だけでなく、それぞれのつながりの中で共に関わっていく。運営委員会を出発点にして、日々のかかわり、連携、日常のつながりを大切にしている。

**三重** (自市では人権研修になると帰ってしまう)。人権教育研修に対する保護者の、PTAの意識について。(自市では障害者差別に関わる発言を相手を攻撃する言葉として、子どもたちが使う例が後を絶たない。地区別懇談会や家庭訪問など取組を通して子どもたちどうして注意しあうなどの成果もあるが…)。高松市における子どもの人権にかかわる実態(障害者差別や性的マイノリティーに対する差別に関わって)とそれに対する取組について、市民全体の人権意識の高揚につ

いて、聞きたい。

**報告者** 参加されない保護者に対して、各校区ごとに学級参観や学校行事とタイアップする、日曜日に実施する、お便りに加えて、メール配信して連絡するなど工夫されている。障害者や性的マイノリティーに対する差別的な言葉をからかいや攻撃の言葉として子どもたちが使っている現実がある。市としては、例えばLGBTについて教職員向けのパンフレットを作成するなど、まず教職員が正しく認識することが子どもたちへの指導や働きかけにつながるということで取り組んでいる。障害者問題に対しても、学校の中で必ず障害者問題の学習を行っており、その中でしっかり取組をすすめていく必要がある。5年に1度、人権意識に関わる市民意識調査を行っている。同和問題について、全く知らない、わからないという方もいる。正しく認識してもらうために、学校教育の中でしっかり同和問題学習を進めていく必要性を感じている。

**佐賀** 行政が学校等の取組をバックアップすることになったきっかけは何か。

**報告者** いきさつまでは把握できていないが、一箇所だけですすめていくのではなく、どのところでも取り組んでもらいたいという思いでしている。

**高知** 保幼小中対象の部落問題学習の指導資料の作成にかかわって、その中身等を詳しく。また、すべての子どもの進路を保障する、どんな取組、成果があるか。

**報告者** 校種が違うので、すべてを網羅したものをつくっているのではなく、この年は幼稚園、この年は小学校の指導資料というように年を分けて作成している。例えば幼稚園であれば日々の保育の中での人権教育の視点や実践を集め紹介する。また教職員研修で使えるような内容など。小学校中学校については同和問題に関わる指導資料を、県で作成している読みもの資料をもとに指導案やワークシートなど授業で使えるような指導資料を作成し、活用を様々な場で呼びかけている。いじめや不登校等に関わって、特別これというものはないが、日々の取組、人権教育の中で取り組んでいる。

**香川** 法律だけでなく、現実を見て、子どもたちの課題の中にあるから取り組んでいる。同和地区のある校区に勤めているが、これを高松市内全体に広めることを使命に取組を進めている。現場と行政が力を合わせて取り組んでいる。

**香川** 校区の文化センターで地元採用で職員として働いている。法切れ後、地域のバックアップも解放子ども会も弱くなる中、また教職員の世代交代も進み、連携が薄れてくる中、もう一回子どもたちの実態・課題から見直そうということで、この魅力ある校区をつくる会を立ち上げ、今取組を進めている。

**香川** 小学校としては、就学前、中学校、地域、

文化センターと連携しながら進めていくことを大切にしている。魅力ある校区をつくる会の中で話し合い、そこに行政にもバックアップしてもらい、講演会や研修会、共通プログラムの実践など様々なとりくみを進めてきた。

**香川** しっかり部落問題学習に取り組んだから、結婚差別に立ち向かえたんやという卒業生の声がある反面、校区の保護者の中には、うちの学校でやってくれているのはわかるけど、まわりの学校ではやってくれてるの。もっとほかの学校にもやってほしいという声がある中、今年度から高松市内全体に公開研究授業を行った。

**香川** 来年度から中学校選択制が始まる。今後もっと高松市内全体で取組を進めていきたい。

### Ⅲ 1日目の総括討論及びまとめ—

**大分** 講演をする機会があるが、わたしのテーマは常に、「人権研修はだれのためですか」、「人権学習は誰のためですか」ということでしている。2本の報告を聞いて、何をやったかということよりも、「私はこうしました」、「私はこう感じ、今やっています」ということが大事だということ。部落差別解消推進法を受け、部落問題学習のあり方をもう一度しっかり考える必要がある。わたしたち自身が生き様を、人の痛みを差し出して考えられるような授業をしていかないといけないと感じている。わたしの場合は、自分のつれあいが部落出身者であることで自分の親が部落差別をしてしまったし、私は傍観者としてしてしまった面があった。自分の子どもに立場を自覚させるために、親として悩んだ。子どもには下を向かないでほしいし、最終的には仲間とつながってほしい。そのためにどうやって語っていくか悩んだ。子どもたちに授業する際には、自分はこうしてきたということを差し出せるような授業をすれば伝わる。

**香川** あらためて自分自身を見つめる時間になった。差別の現実に深く学ぶという点で考えても、本音が出たら、それが差別の解消につながるわけではない。何十年としてきた、この全同教の場もそうだが、差別の現実から深く学び、当事者わたしたちも当事者ですが、差別に苦しみ、悲しみ、憤りを感じた当事者が必ずいて、その思いから差別をなくす営みがここで行われてきたということ、この2日間で確認したい。

**三重** 私は太鼓をつくっている。その中で、太鼓をつくってきた人たちのすばらしい人たち。その太鼓の皮をつってきた人はもっとすばらしい人たち。そのことをもっと子どもたちに伝えたい。子どもたちに語る時にその人たちの顔が浮かぶ。その人たちの顔が浮かばなかったら、その話ではできない。当事者の思いを受けとめて、取り組んでいくことが大切。

**兵庫** 「始めてみよう、これからの部落問題学習」をもとに県内でも実践が広がっている。PR。

**島根** 様々な資料、かなり古い資料もあるが、どうしたらいいかわからず、そのまま使ってしまうこともある。埋もれている資料もある。くわしい人に聞きながら、社会の状況も変わる中、新しいことも取り入れながらも、進めていくことを大事にしたい。

**協力者** 2本の報告を受けて、差別意識や無関心な自分に気づくきっかけになる学習・啓発や、その学習・啓発を通したまちづくりをどう進めていくかという報告・議論があった。差別はよくないとか、正しいことしか言わせない学習では差別解消には向かっていけないということが確認できた。報告者が取組の中でどれだけ学習しても他人事で自分のものにはなっていなかったといわれていたが、その解消の一つとして対話の大切さが見えてきた。今日の報告が終わった後に、報告者と質問者が話されていた。自分が差別問題に対して感じていたことを差し出し、そのあとやりとりを通して、自分の中にある意識について自分自身も気づいていける。そういう対話を通して、人のつながりが築いていけると感じた。人権のまちづくりや学習・啓発にかかわる人が、どこにたって取組をすすめていくのか問わなければならない。立場でしゃべっていると人にも伝わらないし、自分自身に向き合っていくことにもつながっていないということも確認できた。また、実態や取組のノウハウについての質疑が集中したことから、どの地域においても差別を解消していかなければならないという課題が大きくあり、その必要性を多くの方が感じている表れだと感じた。同対法がきれて、運動が弱まる中で、学習・啓発や子ども会や運動等をどう維持していくのか。もう一度、子どもの実態を見直し、そのための地域教材をずっと大切にしていること、学校・地域・行政がつながって話し合いを繰り返し、つりがりなおしてきたことも伝えられた。人と人がつながる学びを大切にしなければならないということが見えてきた。今日はまちづくりの報告を受けた。あすにつなげていきたいことは、差別の中を生きてきた方の顔が浮かんでこないという意見が出されたが、くらしを見つめる学びがどう創り出されているか。そこに生きる人の顔が浮かぶ学びをどうつくり出されてるか。その学びを通して人と人がどうつながっているのか。そして、当事者だけにがんばらせるだけではない学び、差別の現実深く学んでいくとくみはどうつくりだしていくのかを明日の報告を通して、さらに深めていきたい。

#### 一報告3-⑱

「書き残したい、部落差別への思い」

(滋賀県人教)

#### —主な質疑と意見—

**三重** 識字教室がある校区の学校とのかかわりや、教職員とのつながりを聞かせてほしい。

**滋賀** 学校として、市の事業としてあったところは、

講師として教職員が参加していた。わたしも差別をなくす活動にかかわりたいという思いで参加しはじめた。今は自分含めて2人の教職員が関わっているだけで、学校の中でかかわる教職員を増やしていけていない。ただ、4月には全学年で教科書配布の際に、教科書無償の取組の学習を行ったり、6年生の部落問題学習の中で識字の学習を行っている。

**報告者** 学校の協力で「小中学校の教科書はなぜタダなの」というポスターを市内の小中学校・養護学校で掲示してもらっている。また地域の小学校の5・6年生の子どもたち対象に、識字について学習する場がある。

**三重** 2016年、センターが閉館になり、市の事業として識字教室がなくなった後、どんな形で続けられているのか。

**報告者** 自分たちで運営していかないといけないので、毎年カレンダーをつくり、また3年間は、市の支援事業に登録して、活動資金にしているので、どうしても識字生に負担がかかってしまう。センターは今のところ会場として使っているが、今後どうなるかわからない。

**高知** 報告の中の2つの差別事象を、市として問題にしないとかそういう雰囲気があったのか。

**三重** 関連して、差別事件に対する支部や地域の人のかかわりはどうであったのか。

**協力者** その時、どうして解決にいたらなかったのか。その時のまちや運動の状況について。

**報告者** 小中学校の場合は取組があったが、高校の場合は様々な事情で取り組めないと言われた。県連の職員も動いてくれたが、高校では同和主任も加配もかわり、新しい担当は出てきてくれなかった。ただ話し合いにも参加してくれた教職員が何人かはいた。ほんとうにくやしい思いをした。

**滋賀** 差別事件のあった1980年後半から取組が活発になり、組織的に動き始めた。それまでも差別事件等に対して行政と運動で取り組んでいたけれど、十分ではなかった。差別事象に対して取り組まない雰囲気があったわけではない。ただ、差別事件の当事者・提起者である報告者を結果的に無視するような形になっていた。1990年以降はそうした状況も変わっていった。ただし、高校については報告者が言われていたように担当者により全然ちがひ、組織というより個人のレベルで、当時の高校は動いていた。

**協力者** 運動が整備されていく途中であって、十分に取り組めないという状況もあったということでした。報告者が、差別が厳しい中だからこそ、力をつけていきたい。そのための識字教室でありたいという話があったが、そのあたりでの各地での取組や思いなどについて出してもらいたい。

**高知** 隣保館をめぐる状況が厳しくなっている中、解放同盟や市人教とも協力して、識字学級を残して、次につなげていきたいという思いを職場に持って帰りたい。

**福岡** 校区内の識字学級に参加して2年めになる。多くの識字生が字を獲得しており、参加している教職員が学ぶ場になっている現状があるが、それでいいのかという思いもある。報告者が通われている識字学級で文字を獲得されている方はどれくらいいるか。今識字やっていることで自分が勉強になっている、活かされていると思うことがあれば、教えてほしい。

**報告者** はじめは文字を取り戻すということで入った方も、今はある程度の文字を獲得され、支部の女性部として入った方と今は一緒にしている。毎週マンツーマンでやっているが、月1回はみんなで同じ課題でしようということで、はじめは解放新聞を読みながら、わからないことは先生たちに聞きながら、このことについてどう思うか話し合った。私は、いま同対審答申を書いている。自分がわからなかったら人に説明できないから、書きながらそのことを学んでいる。部落差別解消法についてもやりたいと思っている。ほかの方も自分の課題を見つけて、取り組んでいる。

**三重** 隣保館で勤めている。識字教室に小中の教職員、生涯学習課の職員も月1回は来ている。校長が変わるとこんなに違うのかということを経験前から感じている。また教職員の中で積極的に取り組む方がいるかどうかによっても違ってくる。小3の学習で文化センターが差別に対してこういう仕事をしているということの説明している。中1の学習でも毎年、識字学級との出会いを伝統的にしていたが、いったん中断していた。その時に識字生が思いを語ってくれている。識字学級の中で教職員も学び、そのつながりの中で、子どもたちにつないでいくということをこれからも大切にしていきたい。

**福岡** 報告者の識字学級では、どれくらいの教職員が関わっているか。自校でも校区内の3つの被差別部落があり、学校と行政と運動体が協力して、多くの教職員が参加している。つながりの中で識字生が語ってくれた被差別体験から教職員や行政職員が学び、それを子どもたち、実践にかえていくことができる。識字生にとっても自己実現の場になっている。部落問題学習を進めていくうえでも、多くの教職員が識字学級に通うことが大事だと感じている。

**滋賀** 報告者の識字学級では組織的なくみはできてなかった。かかわる教職員も学校としてではなく、個人的なかかわりやつながりの中で識字学級が立ち上がり、今もその形で続いてきた。

**協力者** 識字学級や解放子ども会等で力をつけることにどう周り関わっていくのかという課題が明らかになっていった。報告の中でも、識字教室が始まった時、ひっそりと誰も来ない時間にやっていたという話があった。一番言いたくないけど、一番わかってほしいこと、そこにその思いが込められている。また、昨日から、差別の現実を深く学ぶというが、なかなか自分のものになら

ない、他人事で終わってしまうという課題か出されていた。そこにどうやって自分で近づいていくのか。システムが構築されていても、かかわる自分自身の感覚や感性を磨き、自分自身の生き方を問わなければ、近づいていくことはできない。のちの討論の中で深めていきたい。

#### 一 報告4-④

「識字の取組から紡いできたもの」(奈良県人教)  
一 主な質疑と意見一

**三重** 報告の中にあつた識字生の作文、自分の関わる識字学級の3人の識字生とも共有したい。

**島根** 識字生の作文の中で、小学校時代逃げてしまっていた自分がいるとあつたが、そうではなく、逃げさせていた学校教育があり、そこに向かわせない差別が存在したから。作文には、うらみつらみは書かれていない。そうではなく、自分が文字と出会った喜びが書かれている。

**報告者** 作文を書いた識字生のご両親もほんとうにやさしくて、子どものことをかわいがって育ててこられた。小学校に通い続け、その後、中学校に行かせてもらえるものだと思っていたが、田畑を持っておられず、共働きをされていた両親は、食べるものに困っている状況の中、子守奉公をして家計を助けてくれないかということで中学校の入学を断念せざるを得なかった。

**大分** 自分自身も重なる出会いや経験があり、「私と識字との出会い、原動力となった恩師の方からの被差別体験等の聞き取り」の部分について、詳しく聞きたい。

**報告者** 奈良県主催の識字の集いで、ご自身が差別を受けてきたこと、学校の先生から非常に露骨でむごたらしい差別を受け、育ってきたこと。だから行政や教育、保育に対しては何よりも厳しい姿勢で臨んでおられた。この話を聞き、次年度の解放文化祭で、中学生の子どもたちと一緒に影絵劇という形で発表した。

**福岡** 運動の先達たちの思いを子どもたちに聞かせるとりくみをしている。その中で子どもたちはあたたかさとかたくましさを感じている。ある中1の子どもが、識字のおばあちゃんが教材となっている授業で、「おばあちゃんは文字を獲得した以外に何を学んだと思いますか」という質問に対して、「人に支えられていることを学んだんじゃないかと思う」と言った。今も、識字学級の取組の中で、子どもたちに広げられていること、また奈良県教委が主催となって識字の集いが開かれることになった経緯について、教えてもらいたい。

**報告者** 奈良県全体のことはわからないが、奈良市では解放子ども会という形では、どの地域でも今現在は行っていない。周辺地域も含めた子ども会はあるが。直接子どもたちに識字を通して、社会的立場の自覚をさせていくということはできていない。ただ識字学級への聞き取りの訪問等を行っている小中学校は奈良県・奈良市でも行ってい

る。小学校6年生の社会科の教科書の中で、識字のことが取りあげられている。ただ、すべての小中学校で行えているわけではない。奈良県教委の主催かどうかは十分把握できていない。ただ和歌山県では和歌山県と県教委が主催する読み書き交流会が毎年実施されている。150名はくらない識字学級生と県教委等の行政職員が参加する1泊2日の研修が行われている。

**奈良** 奈良県内に解放子ども会いくつかある。中学生の数もどんどん少なくなる中、中学生対象にムラのおばちゃんやおっちゃんたちの話をきく学習会をしたり、活動を進めている。その中で、中学生も学校の中でみんなに訴えたいということで、地区の解放文化祭や地元の交流会などで劇をしたりなどもしている。ムラの子どもの人数が少なくなる中、周辺地域の子どものも含めて中学生友の会という形で、青年が中心になりながら活動しているムラもある。奈良県人権教育推進協議会が中心となって、解放同盟と教育団体が連携をとる中で、行政とも交渉し、識字の集いが行われるようになったのではないかと。

**報告者** 奈良県人権教育推進協議会識字研究部には、解放同盟奈良県連にも参加していただいて、ともに活動している。今後さらに交流を深めていきたい。

**奈良** 国際識字年をきっかけに県が主催でスタートしたと聞いている。できるだけ多くの方に参加してもらいたいと思っているが、県民の参加が少ない、学校の教職員にも周知されていないなどの課題もある。

**大分** かつて同推教員していたころ、「他県には識字学級があるのに、大分にはなく、学ぶ機会もなく、うらやましい」と言ったことがあった。その時、「大分にも非識字の人がいっぱいいる。ただ、あなたがそれに気づいていないだけ。いずれわかる 때가くる」と言われた。実際に、つれあいが被差別部落出身で、結婚する前、彼女に家によく行く機会があり、お父さんともよく話した。ある時、夜お父さんが家にはいないことがかなりあった。そのことをつれあいに聞くと、「実は2階にいた。車の免許がなく、無免許で運転してつかまりかけたので、お母さんと一緒になって辞書を変えて勉強していた」とあとから聞いた。こんなに身近にあった。一緒に勉強していた、ばあちゃんが今まだいる。そのばあちゃんから当時のことをくわしく聞きたいと今日の論議を聞きながら感じた。

**報告者** 自分のより近くの人から聞き取りをすることの難しさもあるが、亡くなってからでは遅すぎるわけで。私が恩師から被差別体験を聞き取り、影絵劇にした1993年当時、全同教の研究課題には、ムラの古老からの聞き取りを今のうちにしておかないといけないというようなことが書かれていた。

## —報告5—②

### 「多様性を尊重するまちづくり」(三重県人教)

#### —主な質疑と意見—

**和歌山** 市長のリーダーシップでパートナーシップ条例ができたということだったが、それまでに市内に住む当事者やその周りからの意見や要望があったのか。それを行政として把握するような取組があったのか。また、行政の中で、性別記載する書類や採用募集要項の変更など、具体的に取り組んできたこと、取り組もうとしていることがあれば。

**報告者** 市内でカミングアウトして活動している当事者がいなく、当事者の支援団体もないなか、パートナーシップ制度をどのぐらい利用される方がいるのかわからない中、この制度をはじめた。当事者の思いをきけていなかった。きくしくみもなかった。それまでは人権施策総合計画の中で、様々な人権課題の中の1つに性的マイノリティーの課題があったが、これまで具体的な取組はなかった。役所の書類の中で、この書類に性別欄は必要なのかという当事者の声をきく中で、市として性別記載のあるすべての公文書、アンケートに性別記載は必要か、その中で削除できるもの、見直せるものはどれくらいあるかということをも所属に照会し、性別記載欄を減らしていく、また3つめの選択肢を入れていく方向で取組をすすめている。採用時のことは人事課と現在相談しながら、なぜ性別を聞くのか、書いてもらう性別は性自認なのか、戸籍のものなのか、書くときに悩みがないように注意書きを入れるようにしている。性的マイノリティーであることをオープンにしている職員はいないが、職員の中にももちろん当事者がいる。職員共済の給付等において、不利益が出ないように規則の改定についても行ってきた。

**兵庫** どんな意識調査をされたのか、またどのように周知されたのか

**報告者** 実は制度を実施するにあたって、市民意識調査は行っていなかった。実態等の裏付けが必要という意見もあったが、少なくとも5%の市民が当事者として苦しんでいるという事実、当事者であることを言うことすら難しい状況を踏まえたとき、行政として取組を行っていききたいということを、市の広報や行政チャンネル(ケーブルテレビの番組)、地区懇談会、市民にも周知してきた。

**兵庫** 学校現場におけるLGBTの課題に対する取組について。

**報告者** 当事者からの聞き取りを行う中で、学校時代が一番つらかったという話をよくきいた。先生が保健体育や家庭科等の授業の中で、結婚等について話をする時に、同性カップルをまったく想定しないで話をする。また学校内ではホモなどの言葉が飛び交う。その中で自分のセクシャリティーについて言えない。自分が変なのではないか、

異常なのではないか、死ぬしかないと思って。誰か一人でも理解者がいれば、自分たちのつらさはだいぶ違ったという話を聞かせてもらった。だから教育現場で取り組むこと必要。市教委と連携し、研修等している。まずひとり相談できることをということで養護教諭対象に研修をしたり、シールを保健室に掲示してもらうようにした。また当事者の方を講師として研修をしたりもした。教職員の意識が、その言葉やしぐさなどにあらわれる。教職員が日々の学級の中で実践することが大切。中学校の授業の1つとして性の多様性について学ぶカリキュラムをつくれないうことと、それに向けた次年度の研修を準備している。

**奈良** トランスジェンダーの方が入院された時、どういう対応をされているのか。

**報告者** 親族ではないので病室には入れない、手術に同意できないという同性カップルの当事者の声をきき、市立病院では同性カップルの方も家族同様として扱うこととしている。トランスジェンダーの方が入院される時、トイレ、相部屋は性自認の方にするのか、戸籍の方にするのか。市営病院とも相談し、本人の要望を聞かせてもらえる状況をつくるということでシールを張ってもらったりしている。一人ひとりの要望をていねいに聞くことを大事にしていきたい。

**協力者** LGBTにかかわる報告であったが、部落問題との重なりもあった。様々な観点から、実践を踏まえて。

**三重** 当事者が見えないという事実。カミングアウトできない、声をあげられない現状がある。市内の1万人の高校2年生にアンケート調査をとったところ、1割が自分もそうかもしれないと答えた。自分を責めたことがある、自殺を考えたことがあるという声もあった。その子たちが自分らしく生きられるように、当事者がいるという前提で取組をすすめていく必要がある。各自治体が声をあげ取組を積み重ねていくことが国を動かすことにもなる。

**三重** 学校現場での取組について、当事者の方に中学校に来ていただいた。13人のうちの1人を探すのではなく、いると思って寄り添ってほしいという話があった。

**三重** 小学校でもカリキュラムの中に入れて、取り組んでいる。市の人権の集いで、小学校6年生が絵本をもとに発信したりしている。

**奈良** 私自身がトランスジェンダーで、高校の生徒・職員にカミングアウトした状況で働いている。授業の中や県内の高校で生徒向けの講演を行った際、「友だちに同じ立場の子がいて、どうしたらいいのか」という相談を受けたり、当事者の子が泣きながら自分のことを語ってくれる場面もあった。

**福岡** 私のパートナーが性同一性障害で、認めるとか理解するとかではなく、少数者を排除しないでほしい。例えば、自分のきょうだいの結婚式に

いけないなど、冠婚葬祭の場面で。また、当事者の子がいたら寄り添わないといけないというようによく犯人探しになってしまう。「実は当事者だけど、学校の先生に伝えていません」という子に出会った。その差別をつくっているのは私たち大人で、当事者がオープンにできる環境をまずつくっていくことが大切。寄り添う前に、あの先生なら相談できる、そんな環境をつくっていくことから始めること。

**三重** 前職が地元のケーブルテレビに勤めていて、パートナーシップ制度が始まった時の記者会見の取材をした。その時の「私たちは何も悪いことをしていない。このパートナーシップ制度ができたことで、私たちは堂々と二人で生きていくことができる」という言葉が忘れられない。ぜひ、この制度を全国に広めていってほしい。

**和歌山** 当事者がいて、当たり前という意識をまず持ってほしい。チーム紀伊水道という団体にかかわっている。10数年前、当事者団体をたちあげる時、この名前にしておかないと、当事者団体とわかるだけで、当事者がそこにいけない現状があった。そうした現状の中に当事者がいるということ。SOGIという言葉があるように、性の問題はすべての人の問題だということ、誰もがかわりのある、すべての人に関わる問題。取組を行ってほしいと求めた際、どれだけの市民の要望があるかといわれるが、報告のあった市で、行政の方から取組をすすめられていることが心強い。セクシャルマイノリティーの問題に限らず、こういった基本的なスタンスですべていってほしい。

**三重** 市長のリーダーシップ、その背景には、部落問題をはじめとする人権課題に取り組んできたことがある。解放同盟の交渉の中でもLGBTの課題が出ていた。当事者がまわりにはいないというのも部落問題も一緒。ほんとうはいるのだけど、気づいていないだけ。当事者がいるということを前提に取組をすすめていくことが大切。

### Ⅲ 2日目の総括討論及びまとめ

**兵庫** PTA役員をした際、校舎のたてかえがあり、トイレをどうするのかという論議になった。また、男女別名簿についても、十数年前に全同教で差別名簿ではないかという論議があり、混合名簿の実施等につなげていくことができた。

**三重** 子どもたちの障害者を差別する発言等が続いている。教職員が家庭訪問をすると、発言したすべての家庭において、家庭内でそうした言葉が使われてきた、使われていることがわかった。学校での取り組みだけではなく、地区懇談会やその地区のサロンの中で伝えていくなどの地域での啓発活動も継続してやっていきたい。

**大阪** 今、学校で男女共生教育の担当をしている。4年生に、自分の心とからだの性が一致なくて悩んでいる主人公が出てくる絵本を通して、学習した。絵本の中で、それをだいすきな友だちに伝

えるときに「この話をしたら、あなたが友だちでなくなってしまうかもしれない」というとても切ない台詞があって、この言葉をウチの子やからこそ、わかってほしいという思いで取り組んだ。部落や外国にルーツがある、心とからだの性が一致しないなど、様々な課題を抱える子どもたちが構内にいるからこそ、「自分たちが言わせにくい空気をつくっているんじゃないか」とか、「こんな風に悩んでいる友だちがいるんじゃないか」ということを気づいてほしいと思って取り組んでいる。職員に対する当事者の方に来てもらって話をしてもらった際に、自分のこと打ち明けるときにすごくドキドキしたという話を聞き、部落にルーツのある職員は「部落問題と一緒にと思った」と感想を書いてくれた。今まで部落問題学習に取り組んできた学校だからこそ、この取り組みについて、もっとすすめていきたい。

**香川** 部落問題の解決に向けてという思いで地元採用で職員として、隣保館に勤めている。まず啓発する立場の私たち自身が何も発信できないということで、様々な人権課題について、当事者団体との交流を持ったり、当事者の思いを研修で聞いたりしている。まず気づきがなかったら、啓発につなげられない。自分は部落出身なので部落問題については自分が当事者として語れるが、それ以外の人権課題について語ることはできないが、知ることによって寄り添うことができるし、そこから発信することができるということで、職員研修を広げている。その中で大事だと思うのが教育の力。学校と地域が連携しながら取り組みを進めていきたい。

**奈良** 過去、小学校の教員をし、報告者とともに識字部会でも活動している。長年生活つづりかた運動をやってきた。年配の方から聞きとりをし、文字に残していくことは大事だが、若い人たちにも差別の現実を厳しく残っている。そのことを掘り起こしていくことも大切だと感じている。現在45歳になる教え子が同窓会をするたびに、いつも娘を連れてくる。聞くと娘には障害があり、気になって私ひとり町に出られないという。後から、離婚して再婚してその娘がいる。離婚した理由に差別があるのじゃないかと思い、気になり、後日話を聞くと、これまでえげつないほどの仕打ちを受けてきたこと、自殺しようと思ったこと、ため込んでいた思いを話してくれた。「その思いを書いてみないか」というと、「先生書くわ」と書いてくれた。若い人たちにも差別の現実を厳しく残っている。一方で、展望もある。このつづりかたをこの子が書き上げたときに、そのつづりかたを読んだ部落外の友だちが泣きながら話をしてくれた。自分が結婚するとき、相手の家に行く前にじいたんが、部落と同じ地名である町名をいうな、となりの地名を言うように言われた。「じいちゃん、なんでそんなこというんや」とケンカしている。彼の家に行き、彼の親御さんから、ど

この人と聞かれ、その地名をいうと、「どっちの」と言われた。すると彼が「どっちのって、どういう意味や」。同和教育のほんのわずかな一歩かもしれないが、そんな若者も育っている。

**滋賀** 市民向けの人権研修のテキストの編集にかかわっている。先ほどの報告に対する質問で、取組を形骸化させないために、制度を存続し、広げていくためには、説得力のある成果も必要だと感じている。そのようなせいか等があれば、教えてほしい。

**協力者** 後の感想の中でふれるということで、意見交流を続けていく。

**福岡** 20年くらい前、はじめて全同教に参加したとき、同推教員として、同じまちの指導員についてきただけだった。その方が「うちの母は字が書けません」と発言された。それまで一緒に活動してきたのに知らなかった。それ以来、識字の報告がある分科会に参加している。社会教育の分科会では、地域の方含め、本音とか話をされる。当事者の思いを知ることも大事だし、自分ごとになるためには、自分にとって、誰の顔が思い浮かぶのかということのを常に持ちながら取組をしていきたい。

**香川** 昨日、差別の現実から深く学ぶことを共有したいとあったが、今日の報告も含めて、それぞれの場所で多くの仲間が、差別をなくすために取り組んでおられることに感激している。

**兵庫** 組織的な取組は残念ながらまだまだできていないが、「識字学級がなくても、非識字の人がいる」という言葉に元気をいただいた。部落問題を中心に様々な課題があるが、私自身は「差別の痛みや苦しみが、あんたにわかるのか」といわれた時に、きちんと答えるだけの力量はないが、当事者が身をもって体験した差別を語ること、語る場があることが大切だと思う。報告の中にあつたように、識字学級の中で、文字をとりもどし、人間としての尊厳を回復しようとする姿、もっと広く知らせていくべきだし、知らせていかなければならない。そういった思いを真摯に受けとめ、共感し、ともにとりくもうとする環境をつくっていかないといけない。そういった中で、当事者が自分のことを語れるようになるのではないかと。

**兵庫** 年1回地区の文化祭で、40～60代のメンバーを中心に演劇をしている。県の同和教育の副読本の中から、人権・平和教材を題材にした劇などを上演している。こうした地道な活動が、人権を大切にすまじづくりに役立てるのではないかと活動している。

**三重** 報告を受け、LGBT当事者の方が声をあげていただき、ありがたかった。小学校の教員をしていた時、校区の中学校の子どもたちが「制服をなくそう」という運動をし、成功させた。子どもたちの声から始まり、PTAがそれに応えた。いま、LGBTや貧困などの課題がある中で、制服は本当にいるのかということ提起すること

が必要でないか。

## まとめ

2日間の学びをふりかえり、「何のために学ぶのか」というテーマで、まとめてみたいと思います。識字教室の識字生のつづりを紹介します。「あれもしたい、これもしたい」。学校行ってへん。字、書けん。夫や子どもに言えへん。でも、ひらがなならだいたい読めた。それに、だれも問うてこなかった。だから、書けんことをいうこともなかった。私の友だちは言う。今さら、勉強しても…」字に困っていないのかな。「みんなにわかるから、はずかしい」。字を知らんことを、アホやと言う人がいるからな。私は、困ってる。役場からの手紙が読めない。私はしたい。まごに絵本を読んであげたい。本をいっぱい読みたい。友だちに手紙を出したい。自分でいろんな所へ行きたい。だから、「今さら」とも「はずかしい」とも思わない。金曜日の夜、識字教室。夫も応援してくれる、識字教室。もうすぐ丸八年、識字教室。変わってきた気がする。寄り合いでだまっていたのが、なぜか見えるようになった。今までよりも、明るくなった気がする。楽しみもふえた。あれもした、これもしたい。そして、もっともっと勉強したい。

みなさんは、何のために学んでいますか。分散会を進めるにあたり、わたしは、「何のために学ぶのか」と改めて思い悩みました。どうしてかという、いま勤めている学校は、いわゆる部落のない学校、加配のいない学校で、これまでとは、人権・同和教育への意識があまりにも違っているからです。やらなければ済んでいくような、そんな雰囲気の前に、今まで学んできたはずなのに、のまれていきそうなのです。

本分散会では、①部落差別をはじめとする人権課題を自分に関わることとしてどう向きあってきたか、自分自身の変容や生き方にどうつなげているのか。②差別をなくす取組や思いをどう広げ、つなげていくか。③何を大切に取組をすすめているか。この3つの柱をもとに、差別解消に向けた学習啓発やまちづくりの取組、そして、差別に負けない力をつけていくための識字運動の取組が報告されました。

今日の識字運動に関わる滋賀の報告の中で、報告者から「部落差別への思い」として、度重なって起こった自分やわが子が受けた差別事件のことを差し出されました。その中で、「同対事業が入って環境が整ってみんなと変わらなくなっていくと、次の差別がはじまる。だから、運動し続けなければならないと思っています」と語りました。ここに差別意識の根深さが現れています。また、差別事件が起こったとき、「今起こっている差別事件は放っておかれ、準備された同和問題の学習が進められようとした。今まで学んでいるのになぜ？ どうして？ と怒りや悔しさが込みあげ、行政の人はわかっていると思っていたけど間違っていた。部落差別で人が死ぬのに十分に捉えら

れていない職場の中で、取り残された感じがしていた」と続けました。事件そのものもそうですが、悔しい思いを共有できていかないことこそ、つながっていたと思っていた人とのつながりから人を切り離していく差別の現実ではないでしょうか。

だからこそ、差別に負けない力をつける場が必要となります。差別によって奪われた教育や文字を取り戻す識字運動が、部落差別との闘いであり解放運動の原点だといわれるように、文字を獲得し綴ることは、当事者が差別の中にいることを自覚し、自分を差別から解放していくための普遍的な学びであり生きる力になるのです。また、解放子ども会、識字学級は、当事者にとって何かあったときに、悔しさを安心してしゃべれる居場所でもあります。そして、そこに様々な人、学校、行政、地域、保護者…が関わってこそ、安心して課題を共有でき、差別に向かっていく力になりうるのではないかと思います。報告者は、「識字とは、部落差別によって奪われた文字を取り戻すことだけでなく、部落差別とは何かを知ること、自分を語っていくことだと思っています」と語りました。また、奈良の報告者は「学級生さんたちが綴ってきた作文には、被差別体験やくらしの困窮や戦争の混乱等で、十分に教育を受けられなかった厳しい生い立ちの事実が横たわっています。学級生さんたちとの信頼を深めて…聞きとる、受けとめることが何よりも大切だ」と語りました。

しかしながら、法が切れ運動が弱まっていく中で、識字学級の存続が危うい状況にあります。だからこそ、再度、その役割を発信し、交渉や闘いを視野に入れた課題の洗い直しや共有を行いながら、多くの人とこの運動をつくっていく課題が明確になりました。

どれだけ学んでも自分ごとになっていかない現状に対する学習啓発の取組として、大分からは137行政区で開催される地区人権学習会の取組が報告されました。300名を超す学校、行政、地域住民など、様々な立場の人が関わってつくっていく対話形式の学習会は、差別問題に対する様々な思いを互いに出し合える場になり、互いのつながりが生まれたり、差別問題に近づいていく学びとなっています。論議の中でも、さべつはよくないとか正しいことしか言わせない観念的な学びで終わらせない学習会の取り組み方や行政が組織だって取り組むところに大きな期待が持て、組織づくりに対する質問や意見が多く出されました。しかし、論議の中で「取組を進める中で、差別を受ける人たちの顔が浮かんでいるのか」との指摘がありました。直に話を聞く対話は、たしかにつながりを生みますが、差別の現実に関わることはちがいます。差別の現実に関わることに自分から近づいていってこそ、そこでつかんだ課題が、自分自身の生き方に向き合わせ、自分ごと・じぶんおものになりうるのではないのでしょうか。

部落差別の解消が、教育の力に待つべきものとされることは、香川の報告からも改めて確かめられたと思います、同対法が切れ、運動も弱まっていく中での、学校、家庭、地域、行政、様々な立場の人で、次世代へつなぐための子どもたちの育ちの課題の洗い直しや課題解決に向けて取り組むまちづくりの一例は。今後の取組として、どこの地域でも取り組めることであり、大切な課題と言えます。

三重の報告からは、パートナーシップ制度導入に向け取り組んだ学習の提起がありました。セクシュアルマイノリティー当事者が声をあげていかなければ、取りあげられない問題であっているのかというところで、多くの意見があがりました。報告にある「カミングアウトすることで、親が感じるであろう驚きや失望が恐ろしく、社会の偏見に親までさらしたくない…」という思いは、部落差別の現実にも子どもをさらしたくない親の思いや文字が書けないことを家族にも言えない思いとも重なります。

その人が直面している人権課題が、解決してほしい優先順位の一つです。だからこそ、様々な人権問題が部落問題に重なっていく学びをつくっていかねばならないのではないのでしょうか。自分の直面している言いたくないけど一番わかってほしいことが、自分の中での部落問題だとわたしは思っています。

何のための学ぶのか…、差別をなくす生き方をつかむため、これおかしいなと気づいたら動く人を育てていくために。ほんとうに誰もが安心して暮らせるまちは、ここで生まれたこと、ここでいきることをえらんだ自分をよかったと思え、自分の人生を肯定していけることにつながっていくと思っています。そう思えてこそ、希望や力は見いだされていくと思います。差別に負けずにやりたいことを実現する、なりたい自分を実現する、誰もが差別をなくす生き方をつかむための学びになっていくよう、2日間で得たものを全国各地、ここに集まった一人ひとりの実践に結び付けていくことを確認して、また来年、三重の地でお会いできることを楽しみに、本分散会のまとめとします。